

EurekaXIII

六年制通信 No.25 令和7年11月7日(金)号

道徳

先日少し気になることがあって新渡戸稲造の『武士道』をパラパラめくっていたら、この本はそもそもベルギーの法学者に「宗教教育のない日本では一体どうして道徳教育を行っているのか」と問われて、その答えとして書いたのだと序文にありました。第一章が「道徳体系としての武士道」ですから、なるほど日本人の道徳教育は武士道にありというのが新渡戸博士のお考えであることがわかります。しかし武士道を体現していた伊藤博文ら、いわゆる明治の元勳たちがいなくなって昭和の時代になると武士道を生んだ風土はなくなりましたが、それでも、おそらく沈む夕日のかすかな光のようにまだ少しは人々の心に残り私たちの父祖の世代にとっては生きる道標となっていたことでしょう。今の時代に武士道こそ道徳教育の基本だと言って、君たちになるほどと思うとはさすがに考えられませんがね。しかし私は、もし『武士道』をテキストにして道徳教育ができるかと問われれば、できると答えると思います。例えば、第三章の「義」には「武士にとりて卑劣なる行動、曲がりたる振る舞いほど忌むべきものはない」とありますが、これなどそのまま道徳の教科書に書いてあってもおかしくないですよ。薄い本ですが、このような記述が随所にあります。

少し道徳について考えてみましょう。『新明解国語辞典』では道徳とは「社会生活の秩序を保つために、ひとりひとりが守るべき行為の基準」とあります。ついでながら道（人の道を踏み外してはならぬ、の道です）は「時世の推移、身分の高下にかかわらず、それを踏み外すと反社会行為として指弾を受ける行動の基準」であり、徳は「心がきれいで、努力しないでもすべての行いが人の模範とするに足ること」だそうです。ここに「基準」という言葉が出てきますが、三年ほど前に「規矩準繩」の話をしたことを思い出しました。確か当時財務大臣だった麻生太郎さんが国会で誰かの質問に「私は人間にとって大切なことは、朝は希望をもって目覚め、昼は懸命に働き、夜は感謝とともに眠る、そういうことだと思っています」と答えたこと、この答えに大いに感動したことを紹介したときに、人間には生きる上で行動の規範となるものが必要だという話をしたのです。三年前の「ユリイカ」から少し引用します。人の道を踏み外すことなく、私（わたくし）を鍛え公（おおやけ）に尽くすためには他人はどうあれ自分はどういうことはしない、あるいは他人はどうあれ自分はどうする、そういった自らの行動を律するものがが必要です。律するものとは、はっきり言えば規範となる、生きていく上でいつも自分に言い聞かせている、拠り所となる「言葉」のことです。そういう自分の行動の規範となるものを「規矩」、正しくは「規矩準繩（きく

じゅんじょう)」と言います。『論語』に「七十にして心の欲するところに従いて、矩（のり）を踰えず」とある、「矩」がこれですね。この規矩準繩の最初と三番目の漢字を繋げてごらんください。そうです。私たちが「規準」と言っているのはこのことです。「基準」と書いても同じことです。自分の行動が間違っていないかを確認する物差しを規矩準繩と言うのです。私は、この物差しは、世の中の移ろいに左右されてはいけないと思っています。また、教育とは自分の中に確固とした規矩準繩を作り上げることではないかとさえ思います。以上が引用です。

もう一つ、いわゆる黄金律を生きる指針としている人は世界中に多くいると思います。実践は難しいでしょうが。「人にしてほしいと思うことを人にもせよ」ですね。『論語』の「衛霊公」に弟子の子貢の問い「何か一言で、一生守るに足る言葉はないでしょうか」に孔子が答えたのが「其れ恕（じょ）か。己の欲せざる所、人に施す勿かれ」です。「恕」は「思いやり」でしょうね。後半の「自分の望まないことを人にするな」が黄金律を反対から言った言葉です。私はこちらの方が好きです。できそうだし。

私は、道徳の重要な項目として、天台宗の「忘己利他（もうこりた）」を入れるべきだと思います。漢字から意味は分かると思いますが、平たく言えば、生きていく上で自分に得なこと損なこと、何かプラスのことマイナスのことが必ず起こるわけですが、理性の力で損な方マイナスの方を選ぶということです。他を利するために自分の得を捨てるという行為は動物にはできません。理性と知性を持つ人間だけに許される行為です。この種の物語を若い君たちにたくさん知ってほしいですね。

今週のおすすめ

・長月天音 『キッチン常夜灯』（角川文庫）

「キッチン常夜灯」という名のレストラン。夜から朝五時まで営業しています。こういうの、やはり都会でしか成り立たない気がするなあ。チェーン系のレストランで店長をしている若い女性みもざが主人公。彼女が常夜灯を知るところから物語は始まります。「常夜灯」はプロ意識の高いシェフと愛想の良い堤さんの二人で切り盛りしています。みもざはマンションの火事で住む所を失い、会社の元倉庫のようなところに転がり込むしかなくなるのですが、任されている店ではトラブルも絶えず、神経をすり減らしていきます。そんな時、最高の癒しとなる場所と出会うわけですが、シェフたちの物語、常連さんの物語、それらが挿入され面白い読み物になっています。出てくる料理はどれも美味しそうで、ついでに高そうでした。

私は、キッチンではないのですが学生時代に自分の大切な場所となった三つの喫茶店を思い出しながら読んでいました。全て、とても令和とは思えない佇まいです。まるで昭和がそこに残っているかのようです。一つは東京は神田の「さぼうる」、あとの二つは京都。四条河原町の「築地」と百万遍の「進々堂」（京大北門前）です。ちなみに京都で初めて入った喫茶店は河原町荒神口の「シアン・クレール」。まだ覚えています。高野悦子の『二十歳の原点』に繰り返し出てくる喫茶店です。

BGMは ユーミン の チャイニーズ・スープ でした…。